



堕ちる天使 *Falling Angel* (1978) ウィリアム・ Hjortsberg (佐和誠訳) 早川書房 (文庫) (2/28刊・¥460)

二月に出版された作品。

ニューヨークの私立探偵ハリ・エンジェルは、ある日、元歌手の消息を調査しようとして依頼される。単純な仕事だ、そう思った彼だが、行く先々で不可解な殺人事件が起つていく。普通の殺しではなかった。ブードゥーの黒魔術の印が、いたるところにみつかった。やがて、彼は、大きな疑問にぶつかる――。

オカルト・ミステリ物。しかし、どうしてニューヨークを舞台にした、オカルト・ミステリは、こうも似通った印象を与えてしまうのだろう。もちろん、アメリカでの話題作だけに、主人公の性格(本書では、タフ・ガイ探偵で、その点ニューヨーク)や、展開(ブードゥーをからめて、最後に悪魔崇拝が顔を出す)、結末(これは、少々意外)と、他にないものを持つてはいる。ただ、どこかありふれた感じがする。これは、悪魔が社会の裏側に密かに隠れ、生き続けているというロズマリーの赤ちゃん以来の基本設定がある。ニューヨークは、そういう設定に格好の街なのだろうが、頼りすぎるのもどうかと思う。いま一つ、何かがほしい。